

堤 剛 チェロリサイタル

ピアノ：東 誠三

- ソナタニ長調 口カテルリ
ソナタ第2番ニ長調 Op.58 メンデルスゾーン
オリオン 武満 徹
スペイン民謡による組曲 フアリヤ
序奏と華麗なポロネーズ Op.3 ショパン



2003年6月20日(金) 6:45PM

会場：浜松市教育文化会館

主催：浜松音楽友の会

プロフィール

堤 剛 (チェロ)

幼時から父にチェロの手ほどきを受け、1950年にわずか8歳で第1回リサイタルを開いた。桐朋学園・子供のための音楽教室、桐朋学園高校音楽科を通じ斎藤秀雄に師事し、57年に第26回音楽コンクール第1位および特賞を受賞。60年にはN響海外演奏旅行にソリストとして同行し、欧米各地で大絶賛された。61年アメリカ・インディアナ大学に留学し、ヤーノシュ・シュタルケルに師事。63年よりシュタルケル教授の助手を務める。同年ミュンヘン国際コンクールで第2位、ブダペストでのカザルス国際コンクールで第1位入賞を果たし、以後、内外での本格的な活動を開始。現在に至るまで、日本、北米、ヨーロッパ各地、オーストラリア、中南米など世界各地に定期的に招かれ、メジャー・オーケストラとの協演、リサイタルを行っている。

これまでに、「92年日本芸術院賞」をはじめ、71年「第2回サントリーネ音楽賞」、73年ブリュッセルのウジエース・イザイ財団より「ウジエース・イザイメダル」、98年「中島健蔵音楽賞」など受賞。レコード録音における活躍も目ざましく、《バッハ無伴奏チェロ組曲全6曲》で70年度芸術祭優秀賞を、《ベートーヴェン・チェロ・ソナタ全集》で80年度レコード・アカデミー賞および芸術祭優秀賞受賞。88年秋よりインディアナ大学の教授を務めている。

東 誠三 (ピアノ)

東京音楽大学卒業。片岡ハルコ、井口愛子、野島稔、中島和彦の各氏に師事。1983年、日本音楽コンクール優勝後、フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に留学し、J.ルヴィエ、J.C.ペティエ氏らに師事。日本国際、ヴィオッティ・ヴァルセジア等多くの国際コンクールに優勝・入賞後本格的な演奏活動に入る。国内外のオーケストラと数多く協演する一方、多くのトップ・ソリストと共に演奏している。1997年リサイタルでとりあげた「ショパン：24の前奏曲」の演奏で第24回日本ショパン協会賞を受賞。東京音楽大学、国際スズキメソード音楽院、山梨学院大学ミュージックアカデミーなどで後進の指導にも当たっている。

堤 剛
チェロリサイタル



TSUYOSHI TSUTSUMI
CELLO RECITAL

●ロカテルリ／ソナタニ長調

ロカテルリ(1695～1764)はイタリアの作曲家で、名人芸的技法を持ったヴァイオリニストであった。生涯についてよく知られていないが、ローマでコレルリに学び、名ヴァイオリン奏者としてヨーロッパ各地に演奏旅行をしたと伝えられている。革新的なヴェネツィア楽派の様式を取り入れながら、大胆な重音奏法や特殊な調弦法を用いて新しい境地を示し、後のバガニーニにも影響を与えた。この曲は元々ヴァイオリン曲として作曲され、チェリストのアルフレッド・ピアッティによってチェロに編曲された。

第1楽章はニ長調、4分の4拍子。いかにも軽快でイタリア的、華やかでヴィルトゥオーゾ風。

第2楽章はニ短調、4分の4拍子。短いが非常にメロディアスな楽章。最後に小さなカデンツァが付いている。

第3楽章はニ長調、4分の3拍子。明るいが途中にゆっくりとしたカンタービレが用意されている。アルペジオ型からのコーダは華やかで印象的。

●メンデルスゾーン／ソナタ 第2番 ニ長調 Op.58

1843年、メンデルスゾーン(1809～1847)はライプチヒの音楽院設立に奔走したが、この曲はその年完成されている。前述のピアッティとメンデルスゾーンとの交流から生まれたこのソナタは、音楽表現的にも格段の飛躍を見せ、特に形式において伝統を超えた斬新で独創的な構築が試みられている。

第1楽章はニ長調、8分の6拍子。アルペジオによる主題から入り、ソナタ形式を踏襲しているが、対立的な2つの主題を軸に展開している。貫して一つの楽想に終始し、躍動感溢れるドラマティックな力感が特徴といえる。

第2楽章はニ長調、4分の2拍子。スケルツォではあるが、落ち着いた雰囲気が漂う。チエロの叙情的なカンタービレが心に残る。

第3楽章はト長調、4分の4拍子。コラール風な楽章で、敬虔なイメージに支配されている。アッカでそのまま続く第4楽章はニ長調、4分の4拍子。様々に変化しながら突き抜けようのようなフィナーレは圧倒的である。

●武満 徹／オリオン

現代日本を代表する作曲家、武満徹(1930～1996)の「チエロとピアノのための《オリオン》」は、オーストリア放送協会の委嘱によって作曲され、1984年ウィーンで初演されたが、日本では作曲者自身が企画・構成を手掛けた「今日の音楽」において堤剛、関晴子(ピアノ)により初演された。

ギリシャ神話において、巨神ポセイドンを父に持つオリオンが天空に昇って輝いた大星座にモチーフを探っているが、この曲においてはチエロという楽器そのものの美しさがイメージとして重ね合わされている。

ピアノに導かれるように開始される独奏チエロの独白、次第に明確な線を形成していくまでの過程、その線はオリオンの中の3つ星を象徴し、3という数字が象徴的に扱われる。中間部、C(ド)、E(ミ)、Es(ミ♭)という印象的なピアノを受けて盛り上がりいくチエロの力強さは、なるほど伝説を思い起こさずにはいられない。

●ファリヤ／スペイン民謡による組曲

『三角帽子』などで知られるスペインの作曲家ファリヤ(1876～1946)は、故国の郷愁に溢れた優れた作品を書いたが、あまり作風は一定していない。この「スペイン民謡による組曲」はパリに居住していた1914年、元々歌曲として作曲された。民謡からモチーフを取り込み、その巧みなピアノ伴奏とともに高い評価を受けている。全部で7曲の構成となっているが、チエロ版ではその中の『ムルシア地方のセギディリヤ』は演奏されない。

第1曲《ムーア人の衣装》は8分の3拍子、非常にメロディアスな曲。第2曲《子守唄》は4分の2拍子、静かにゆっくりと奏される。第3曲《シャンソン(歌)》は8分の6拍子、軽快な曲。第4曲《ボロ》は8分の3拍子、激しく歌曲的。第5曲《アストリアーナ》は4分の3拍子、暗い雰囲気が漂う。終曲《ホタ》は8分の3拍子、舞曲的な躍動感があるが、最後は静かに閉じる。

●ショパン／序奏と華麗なポロネーズ Op.3

ショパン(1810～1849)の室内楽作品は数曲と少ない。しかしその殆どにチエロが登場することからみても、チエロを特別好んでいたことが窺える。チエリストの友人も多く、その友好関係の中で全て作曲されている。この曲もラドジヴィル公爵と、その娘でショパンの弟子ワンダのために作曲された。この曲について、「貴婦人向けの華やかなサロン音楽」と、ショパンは友人に宛てた手紙に書いている。

全曲は2つの部分から構成されている。まず序奏はハ長調、4分の4拍子。ピアノの激しい音型で導入し、チエロが短い主要モチーフを奏でる。それが繰り返された後、三連符、四連符のピアノ伴奏に乗ってチエロが華麗に歌い上げる。次のア・ラ・ボッカはハ長調、4分の3拍子。躍動的なポロネーズのリズムをピアノが刻み、チエロが朗々と主題を歌う。突然趣きが変わって、ポロネーズの動きを残しつつ半音階的に推移するが再び主題が現れて、やがて魅惑的な中間部、コーダへと進み、華やかなクライマックスで曲を閉じる。